

A 病院における消化器がん手術を受ける患者の身体運動機能や精神的苦痛と QOL の関連性について

主研究者 吉村珠美（共同研究：國政李紗・砂田亮）

<研究背景>

近年がん生存率は、診断や治療技術の進歩などがん医療の発展により、世界的に増加傾向にある。（文献引用）2006 年にがん対策基本法が成立し、基本的施策として「がん患者の療養生活の質の維持向上」を挙げている。また 2010 年の診療報酬改定では、がんリハビリテーション（以下がんリハ）料が新設され新しいがん医療が求められ始めている。2021 年度より A 病院においても消化器外科がん患者リハビリテーション料の算定が可能となり、消化器外科がん患者に積極的なリハビリ介入を実施している。2022 年度の消化器外科がん患者のがんリハ介入件数は 68 件で、内訳は主に周術期患者が 64 件、緩和ケア 2 件、放射線化学療法患者が 2 件であった。現在は、術前より運動耐容能や筋力増強に加え、生活習慣の改善、Quality of Life（以下 QOL）の維持向上に向けて他職種でリハビリに取り組んでいる。がんリハに対する介入研究は主に国外より報告がされている。介入後には、がん患者の運動耐容能や筋力などの身体運動機能が有意に向上し、同時に精神機能、疲労感、QOL に有意な改善が認められ、職業復帰も促進するなどがんリハの介入効果が証明されている。2013 年先行文献では、消化器がん患者の周術期から自宅復帰にかけて身体機能は術後一時的に低下を示すが、自宅復帰後に術前とほぼ同様まで改善を示している。QOL は身体的運動機能と同様に術後一時的に低下が見られ、自宅復帰後では精神的健康に関連する QOL が術前とほぼ同様に改善する一方で、身体的健康に関する QOL が術前より有意に低い事が明らかとなっている。その背景には治療（手術療法、化学療法、放射線療法）や再発の恐怖などにより、倦怠感や抑うつや、癌細胞による直接的な身体的苦痛が、患者の QOL を低くする大きな要因となっていると考える。がん患者の QOL はがんになった時点で簡単に幸福度が低下しやすく、がん患者の治療に伴う痛みや不安、精神的苦痛も QOL を低くしてしまう原因となる。治療のため入院したがん患者は手術や抗癌剤治療等により一時的に QOL が低下する状況にあると考えられる。

そこで、A 病院における消化器がん手術後の患者において自宅復帰後の身体運動機能や精神的苦痛が QOL にどのように関連するのか明らかにしたい。

<研究の動機と意義>

A 病院における消化器がん手術後の患者において自宅復帰後の身体運動機能や精神的苦痛が QOL にどのように関連するかを明らかにし、がん患者の QOL 向上をめざして他職種介入にお

けるがんリハ実施につなげる。

<研究の目的>

A 病院における消化器がん手術後の患者において自宅復帰後の身体運動機能や精神的苦痛が QOL にどう関連するのかを明らかにする。

<研究方法>

○研究対象

- ・ A 病院に手術目的で入院した消化器がん患者
(クリニカルパス期間を大きく逸脱せず自宅退院出来た患者)
- ・ 認知症の診断がなく入院時の日常生活自立度 A2 以上の患者
- ・ 除外基準は術後創部感染や食事開始後に消化器症状出現にて高カロリー輸液の長期投与が必要であった患者、術後に重篤な呼吸器疾患など合併した患者とする。

○データ収集期間-

- ・ 2024 年 2 月～2024 年 7 月

○データ収集方法

- ・ 研究デザイン：記述的統計分析

- ① 症状評価表 (M.D アンダーソンがんセンター版) 尺度表
 - ② 運動耐容能測定のための握力測定 (引用文献より握力は下肢筋力や体幹筋力のみならず、立位バランスや応用歩行能力までを含めた高齢者の全身的な体力を反映する簡便で有用なテスト法であると記載あり。当院の消化器外科がんリハピリスタフからも簡易的に測定できる身体運動機能の尺度として使用の提案あり。)
- ・ データ収集時期：入院時、退院前日、退院後 (初回外来受診時)

【アンケート内容】

症状評価表 (MD アンダーソンがんセンター版) 使用許可あり

身体的症状項目 13 と精神的項目 6 に対し、全くなかったを 0 とし、これ以上考えられないほど強かったを 10 とする。

○倫理的配慮

- ・ 所属施設倫理委員会での承認を得る
- ・ 対象者の安全および人権の擁護、研究に関する知る権利・自己決定の権利に対する配慮を行う
- ・ 個人情報や秘密の保持、プライバシーの保護に配慮を行う

・対象患者に研究の趣旨や目的、研究結果の取り扱いについて紙面で十分に説明し、同意を得る。

<導かれる課題予想>

入院時から退院後における QOL の変化や QOL に影響を及ぼす要因について明らかとなり、がんリハチームにおける介入について検討出来る。

<参考文献>

- 1) 原・佐野充広・四宮美穂：消化器癌患者の周術期から自宅復帰後までの身体運動機能と Quality of Life の追跡調査 理学療法学第 40 巻第 3 号 184～192 項 (2013 年)
- 2) 食道癌患者における倦怠感と心理状態および QOL に関する検討

<引用文献>

- 1) 原・佐野充広・四宮美穂：消化器癌患者の周術期から自宅復帰後までの身体運動機能と Quality of Life の追跡調査 理学療法学第 40 巻第 3 号 184～192 項 (2013 年)
-